

土地の記憶と物語の力 : 「郊外」の文学社会学のために(1)

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2014-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021184>

土地の記憶と物語の力

——「郊外」の文学社会学のために（1）——

鈴木智之

第1章 記憶なき郊外？

「怖いものなんかあるのか」

「あるよ。記憶」

（三浦しをん『まほろ駅前狂騒曲』）

1. 時空間の形象としての小説

小説は物語の叙述を通じて時間と空間の交わりを形象化する。したがって、そのテキストの読解は、時間軸上に展開される出来事がいかに空間の内に体现されるのか、また、空間的現実がいかに時の流れを呼び込み、その様相に応じて構成されていくのかを読み取る作業になる。周知のように、この視点を提起したのは、ソ連の文学理論家ミハイル・バフチンである。

『小説における時間と時空間の諸形式』においてバフチンは、文学、とりわけ小説における「時間的關係と空間的關係との本質的な相互連関」（Baxtnh 1975=2001 : 143）を「クロノトポス（時空間）」と呼び、作品の構成の根幹にかかわる“時間と空間の結びつき”を把握することを、分析的読解の焦点に置いた。

文学における時空間の場合、空間的特徴と時間的特徴とは、意味を付与された具体的な全体の中かで融合する。時間は、凝縮されて密になり、芸術化され可視的になる。空間も、集約されて、時間・話の筋・歴史の展開の中かに引き込まれる。時間的特徴が、空間の中かでみずから開示し、空間は、時間によって意味づけられ計測される。文学における時空間を特徴づけるのは、両種の系列のこうした交差、双方の特徴のこうした融合である。（ibid. : 144）

この一文にも強調されているように、小説的世界における「時空間」は、常に「具体的な全体」の中に示されるものであり、空間的配置から遊離した時間的リアリティが自律的な形で存在するわけではない。基本的に小説とは、物語的つながりの中で出来事や経験を語るものであり、その筋は

具体的な空間の中で展開される。そこに、空間が時間的に意味づけられ、時間が空間の中に可視化するという関係が生まれる。この不可分な二者の関係を読み解いていくことを通して、小説がどのように「歴史的現実」を認識しているのかを明らかにできる、というのである。

その上でバフチンは、小説作品の中にはしばしば、時間と空間が濃密に交わる特権的な場所が描かれることを明らかにしていく。小説の中で重要な役割を果たすこの“特別な場所”を指してクロノトポスという言葉が使われることもある（これを以下では、“狭義”のクロノトポスと呼んでおこう）。その場所は物語の中に反復的に現れ、そこで筋書きの転換を生み出す主要場面が演じられ、物語の節目が結ばれたり、解かれたりする。したがってそこには、きわめて具象的な形で、物語内容の核心が指し示され、時間軸上に展開された出来事の意味が凝縮される。作品の中でこの特権的な場所（狭義のクロノトポス）が果たしている役割を解析していくことによって、物語全体の構造を把握するとともに、その作品が表象しようとする歴史的世界の構造を明らかにしうる。これが、『小説における時間と時空間の諸形式』に示されたバフチンの基本的視座であった。

この考え方をベースにおいて、以下では、現代の日本文学における「空間と時間」、「場所と物語」の関連を読み取っていく。その際、特に「郊外」と呼ばれる地域の表象に照準化することにする。

なぜ郊外なのか。それは、この都市周辺の空間に生きる人々が、時間的な現実との結びつきを明確にとらえそこなっているように見えるからである。もちろん、どのような空間に置かれていようと、人は「時」の流れの中で構成されていく現実を生きている。しかし、目前の空間的現実とのかかわりにおいて、自分（たち）が生きている世界の来歴（物語性）を把握しにくくなることがある。その時「時と場所との交わり」（クロノトポス）が、日々の生活の中で実感しづらくなり、過去とのつながりの中で現在を生きることが困難になるのである。

この状況に対して、文学、とりわけ小説は固有の嗅覚をもって分け入り、その曖昧な時空間を生きる人々の世界に物語的な形象を与えようとする。その形象化の作業に内在する「現実感覚」（ジャック・デュボア）を抽出することによって、今私たちが生きている「郊外的世界」の構造を浮かび上がらせることができるのではないか。ここに、以下の考察を導く視点がある。

この時、小説のテキストの中に「郊外のクロノトポス」を読み解いていく作業は、単に「文学作品」に対する認識を深め、そこに構成された歴史的現実についての表象を再確認するだけのものには終わらない。他方において、この分析的読解は、現実の郊外空間に対する私たちの“感覚”を変容させ、その歴史性に対する認識を更新することにもまた寄与するはずである。文学的想像力は、単純に人々が抱いている“認識”を反復し、これを形象化するだけには終わらず、人々の目にはまだ明晰な像を結んでいない“潜在化した現実”，人々の意識の周辺に埋もれている“可能性としての現実”に形を与えようとする。この想像的な認識の枠組みを掘り起こし、その視点を借り受けながら“現実”を見直すことによって、私たちはこの世界との関係の結び方を少しずつずらしていくことができる。その意味で、以下の読解は、私たちがこの“曖昧”な郊外空間との関係を結び直すための準備作業という意味をもつものでもある。

では、この二面的作業は、実質的にどのような形で可能になるだろうか。

2. 見えない者がここにいるということ

文学作品の読解・分析を試みる際に、筆者は可能な限り、その舞台やモデルとなった場所を訪ねて歩いてみることにしている。もちろん、どれほど写実主義的な作品であっても、テキストは自立的な意味世界を構成するものであるから、舞台となる土地についての認識がそのまま作品の理解に直結するわけではない。しかし、かつて前田愛（1982）が精緻に論じたように、テキスト空間は外部に位置する現実空間の「写像」として、何らかの関数式にしたがってこれを変換したものと成り立つのであり、外部空間の様相を体験しておくことは、やはり作品の読解に何らかの——通常は“理解の深まり”と呼ぶことのできるような——変化をもたらす。

この時、変化していくのは、テキストに対する関係だけではない。文学作品の舞台としてその空間を体験することによって、場所のイメージが一新されることがよくある。そうでなければ見過ごしてしまうであろう広場や空き地が、物語の中で重要な出来事が生じた地点であることが分かると、その何でもなような空間が輝きを放ち、ある種の聖性を帯びて立ち現れる。物語のテキストを介在させることで、土地と人間の関係はたしかに変容する。そうであるならば、この二重の変容過程——場所の体験を介してテキストの読み方が変わる／テキストの読解を介して場所との関係が変わる——を主題化するところから、空間の文学社会学とでも言うべき研究実践——実践的研究——を立ち上げることができるだろう。

この時、場所（空間）と文学（物語）のあいだに、もう一つの媒介項を挟んでおくことができる。それは“土地の記憶”である。物語とは、それ自体において、人間の時間的な経験を形象化する一つの様式であり、したがって特定の場所を舞台に物語が語られると、その空間に時間軸上のつながりをもった行為（筋）が呼び込まれることになる。この時、テキストはしばしば、土地に宿る記憶を呼び起こそうとする。そこに“かつてあったこと”を想起し、これを語りの中に呼び込むことで、その時点で生起する出来事（現在時における物語）は、一個人が体験しうる時空の広がりを超えて、より大きな集合的記憶の流れの中に挿入される。これによって、（ある一時点の知覚対象としてしか現れることのない）物質的環境が歴史性を帯びた場となる。物語が土地の記憶の憑代となることによって、空間は、それ自体の内に重層的な時間性をはらんだ生成の場へと変貌していくのである。

では、実際に物語のテキストは、人間が記憶を介して（時間的なリアリティとして）空間にかかわる様式にいかに関与するのか。この問いを挿入することによって、場所と文学の社会的関係を問う視点を、もう一步絞り込むことができるだろう。

ここで、呼び起こしておきたいひとつのエピソードがある。すでに他の論考（鈴木 2013）でも言及した逸話であるが、文脈を変えて、再度そこから考えを進めてみたい。

以前、東京の郊外に立地するある私立大学に勤めていた頃、私のゼミに“靈感”の強い一人の女

子学生が在籍していた。彼女の眼にはいたるところに“霊的”なものの存在が見えているらしく、研究室で話をしている時にも、「今先生のすぐ後ろにもいますよ。うん、でもあんまり危険そうな感じではないので、大丈夫だと思います」という感じの言葉が、ごく自然に出てくるのだった。

私（たち）は、彼女の話聞くのが好きだった。例えば、その大学の所在地には、昔、処刑場と墓地があったと伝えられているのだが、彼女によれば、そのキャンパスには本当にたくさんの者が出没するのだという。彼女は音楽サークルのメンバーで、教室でギター練習をしていると、その後ろの机の上を駆け抜けていく奴がいるとか、「スポット」として名高い近くの土手に行くと、その両側から這い上がってくる兵士の姿が見えるとか。私たちはそういう話を聞いて、自分には何も見えないことに安堵したり、それを悔しがったりしながら、しばしば時を過ごした。

ふり返ってみると、その彼女の話は“土地の記憶”を呼び起こす物語だった。かつてその場所で、無念の死をとげた者たちの“魂”の徘徊が、彼女の“眼”を通して私たちの前に浮かび上がっていた。では、私たちは彼女の話をごくまで信じていたのだろうか。そこに語られていたこと・語られていた者たちが、（その存在論的地位において）何かあやういものだと感じていたことは事実である。しかし、彼女の語りの誠実性を疑っていたわけではない。彼女の眼には見えている。それは確かなことだった。私たちの目には見えない者の存在を伝えること。それが、語り手としての彼女の役割であった。

文学者もしばしば同じようなことをしている、のではないだろうか。その場所に住まう見えない者たちの姿を、その土地に蓄えられた記憶を、誰かが“霊媒者”として語らなければ誰の耳にも届かない声を、伝える。そういうものとして、作家や詩人はふるまっている。

おそらくそれは、私たちの社会が——私たちの生きている“空間”がとすべきかもしれないが——実にたくさんのことを“忘却”しようとする、またはさせようとするへの抗いの身ぶりである。その意味で、物語ること（文学するという事）は、一種の記憶実践なのである。

3. 記憶喪失都市？

都市、あるいは郊外に暮らしていると、開発・再開発によって“街”の様相が一変してしまうことがある。それは、景観や外観の中に保存されている“記憶”を失うこと、でもある。

東京都心部の再開発はこの数年のあいだにも精力的に進められ（例えば、東京駅周辺とか、六本木とか）、久しぶりに訪れてみると、昔はそれなりに良く知っていたはずの街区がまるでなじみのない空間になっていることがある。単純に、店舗が入れ替わったとか建物が建て替わったというだけではすまない。しばしば、その街がもっていた雰囲気や匂いがごっそり奪われて、まるで別の“場所”になってしまったように感じる¹⁾。

しかし、これは今に始まったことではない。少なくとも戦後、とりわけ高度経済成長期からバブル経済の時代まで、東京は常に、場所としての同一性の感覚を破壊しつつ、新しい装いの空間を創出し続けてきた。そのありようを「記憶喪失症の都市」と呼んだのは加藤周一（1988）である。

彼は、東京という都市を特徴づける6番目の項目²⁾として「変化の速度」をあげ、次のように言葉を継ぐ。

一年も東京を離れていれば、街の様子が大きく変わってしまうこともしばしば経験する。東京の変化が早いのは、経済的「ダイナミズム」と、個々の建築が周囲との美的調和という観点からはほとんど規制されないことに因る。東京は、過去にこだわらず、万事を更新する。もちろん、空気や水の汚染、下水やゴミ処理、住宅、交通などの諸問題は解決されなければならない。そのためには新しい計画や設備が必要である。古いものを壊して（都市が利用することのできる土地は、ほとんど常に限られている）、新しいものを建てなければ、その都会には「進歩」がない。その活力を東京がもっていることは、どれほど評価しても評価しすぎることはない。しかし、盾には常に両面がある。古いものを取り払って、新しいものを建てることに急な都会は、その個性（常に歴史と結びついたところの）を失う。その景観には持続性がなく、一世帯の記憶さえも結びつく場所がない。「昨日の空」は、もはや、この都会の上には広ることができない。東京は記憶喪失症の都市である。（加藤 1988 : 28-29）

加藤は、東京の街が常に新しい景観を生み出すような創造力をそなえていることを必ずしも否定的に評価しているわけではない。しかし、「街の変わってゆく速度」が「ある限度を越えれば（…）市民の心理に、さらに進んでは文化の性質に、広くかつ深く影響を及ぼすに違いない」。したがって「心理的不安定と神経症の流行、進むことを知ってふり返ることを知らない文化の一種の浅薄さが、次第に著しく目立ってきてても」「それは身から出た錆^{きび}というものである」（同上 : 29）と言うのである。

この批判的視点を引き継ぎながら、枝川公一（1993）は1990年代の前半に、鈴木俊一都知事のもとで進められた再開発構想の進展によって、東京の街が場所としての同一性の感覚を急速に失いつつあることを指摘していた。

東京から、見慣れた街がどんどん消えている。しかもその消え方のスピードが速まっている。そのこと自体は成り行きであって、異を唱えるにはあたらない。しかし、その後、どのような街が生みだされていくかが問題である。最近では、以前に同じ空間になにがあったのか、まるで不明になってしまった、新しい街が目につく。せっかく空間が貯めこんでいる記憶があるのに、一切を放擲して顧みないかのようである。東京の財産が、こうして浪費されている。（……）記憶の継承とは、別に史跡や遺物を保存することではない。そこにわだかまる無形の「気分」を伝えていくのである。（枝川 1993 : 8-9）

これよりも早く、1984年に刊行された『都市の記憶』の中で粉川哲夫は、やはり憎悪に近い感覚とともに、次々と外観を更新していく都市・東京に「呪詛の言葉」（粉川 1984 : 10）を浴びせている。

遊歩する思想家・粉川は、街を歩く時には常に「うさんくささへの期待」（同上 : 9）があると言

う。しかし、東京の「街路は白っぽく小ざれいになり、室内も、スーパーマーケットのように、さっと見わたせばその全体像の察しがつくほどに予定調和化してしまった。(…) 街路と室内は、アルミ・サッシのガラス戸や自動ドアで画然と仕切られて、そのダイナミックな相互関係を断たれてしまった結果、街路はただの通行の場として、室内は身体運動がより拘束された場として分断されることになった」(同上：10) のである。

粉川は、文化的な混成の中から立ち昇る生活のにおいを消去してこざれいになっていく東京という都市を、「スリック・シティ」と形容する。「英語で“あかぬげした都会人”のことを slicker というようだが、slick には“けばけばしい”とか“ペラペラの”，“見かけだおしの”という意味があり、スリック・シティとはまさしく東京の街路を表現するためにある言葉ではないかと思うのである」(同上：47)。東京は、その住人たちに「均質的な画一の文化と生活を強制」する「一種の収容所」(同上：12) と化している。そして、この都市に暮らすということは、常に「故郷」を奪われそこから追い立てられていくことに等しい。ゆえに、粉川に言わせれば、この町の住人は一種の「難民」(同上：131) として生きているのである。

4. 記憶なき場所としての郊外？

都市（都会）としての東京が次々と記憶を手放していくのだとすれば、その周縁に広がる郊外はどうだろうか。

郊外は、都市の人口が居住地を拡張していくことによって生じた、都市と農村の境界的な性格を帯びた周辺的生活空間を指す。当然のことながら、郊外化が進む以前から、その土地にも人々の暮らしがあり、歴史があり、受け継がれてきた伝統や記憶がある。しかし、若林幹夫(2007, 2009)が論じたように、郊外に流入してきた新しい人口（郊外住宅地に暮らす雇用労働者世帯）は、労働の拠点を都心部においていることが多く、伝統的に維持されてきた地域の共同的生活と濃密にかかわろうとしない。その結果、「旧住民と新住民の間で、地域の記憶の分断と不連続が生じる」。そして、郊外開発が進んでいくと、「先行して存在してきた農村社会もまた、兼業化や自営業化、雇用労働者への転業等により変質・解体し、それと共に地域の記憶の媒体となってきた共同の作業や祭事なども衰退し、かつてあった集落や田畑、雑木林などの風景も失われてゆく」(若林 2009：11)。したがって、旧住民もまた、地域空間に埋め込まれていた“記憶”から切り離されてゆく傾向にある。

“過去”から“現在”へとつながる時間の断絶は、生活の形態・共同性の形成を支える“空間”の再編成によって加速する。戦後日本の郊外住宅地の開発は、かつてそこにあった地域生活の空間を、その記憶ごと根こそぎ剥ぎ取っていくような暴力性をもって推し進められてきた。特に、大規模なニュータウン開発のすすめられた場所には、近世以前からその土地に蓄えられてきた伝統や記憶の痕跡を見いだすことは容易ではない。そして「土地の歴史や記憶を想起し、読み取るための標識となる旧来の地名」もまた『『○○が丘』や『△△台』等の、どのニュータウンでつけられても

いいような、交換可能でそれゆえ均質的な新たな町名によって置き換えられていったのである」(若林 2009: 11)。若林は、ニュータウンに見られる「まるで模型のようなその景観デザインや紋切り型の可愛さの演出は、そもそもなんの歴史的な記憶も伝統も文化ももたないがゆえに、そうした記号やイメージを欲望してやまない、郊外という場所と社会の根無し草性を示しているのではないだろうか」(若林 2007: 29)と問いかけている。

三浦展もまた、日本の諸地方の「ファスト風土化」を批判する文脈において、生活の中から、その土地に固有の記憶が消失しつつあると論じる。彼は、食生活に供される商品が、どのような地域でもすべて一律の味になっていることを指摘し、そのような画一化が、生活の全領域に及ぶものであるという。

衣服も住居も街並みもそうである。その土地の自然や風土と無関係になっている。田圃の真ん中にアメリカ風やら地中海風やらの家が建つ。それはまったく風土と無関係だ。

それは言い換えれば、生活のなかから生産、労働の要素がいっさい消えていくということだ。生活がたんなる消費でしかなくなるということである。しかもその消費は、ますます全国一律、世界共通の均質なものになっている。地方だから地方固有の暮らしがあるというのは、まったくの幻想でしかない。日本昔話のような過去のものになっている。

それは、地方が地方としての土地の固有の記憶を失っているということだ。ファスト風土とはまさに記憶喪失の風土なのである。(三浦 2004: 181)

こうした一面において郊外化した地域は、都心以上に“伝統”の消失と“記憶”の希薄化が進んだ空間、その意味で“過去なき土地”とでも言うべき相貌を見せている。そして、郊外という地域にある種の“危うさ”を感受する人々は、その場所に集積されているべき記憶が欠落しているという認識を、基本的な前提としてもっているように見える。例えば、郊外を「住むこと思想」を奪われた空間と見なす、小田光雄の次のような評言からもうかがえるように。

町や村は生活すること、住むことにおいてほんとうに「人間の作った最も親しみやすい一つの思想だった」。しかし郊外とはなんだろうか。地方から追われ、都市に向かい、都市に住むことを拒絶された生活者たちの約束の地と化した郊外は、「ただの人間の聚落」に近い、いわば群衆の共同体のようにも思える。そしてこの群衆の共同体は同時に、ノマド的な消費者というプロレタリアートの共同体でもある。それに町や村が何百年単位の時間をかけて労働と生活の集積のうえに成立したのに比べて、郊外の出現はあまりに急激だった。郊外とはまぎれもなく「人間の作った最も親しみやすい一つの思想」ではない。郊外の誕生とは、その担い手が日本住宅公団、地方自治体、デベロッパー、住宅産業であることからわかるように、国家や資本の思想と論理によって計画されたものであるからだ。まず1960年代には、団地を始まりとしてマイホームが出現する。70年代以後にはロードサイドビジネスがそのまわりを包囲していく。それは郊外の団地やマイホームと同様、大量生産、大量消費のシステムによって支えられ

た資本の論理であり、その店舗形式は背後に生活空間を抱えることのない、商品の場でしかない。住むこと³⁾の思想が最初から捨象されているのである。(小田光雄 1997 : 238-239, 下線引用者)

だが、郊外は土地の生活の記憶をもたない地域であるという言説³⁾は、どこまでその生活空間の実相をとらえているだろうか。

先にも述べたように、若林幹夫は、郊外住宅地の開発が「暴力的」にその土地の記憶を剥ぎ取り、過去の忘却を強いていることを指摘し、「郊外における地域性の希薄さ」や「歴史や伝統との切断と遊離」(若林 2009 : 12)を強調している。たしかに、「ニュータウン開発」と「地域の記憶」とは「きわめて折り合いの悪い、むしろ相互に背反しあうような位置価をこの社会の中で持っている」(同上 : 2)のである。しかし、その一方で彼は、「その薄っぺらな風景のなかにも、現在に向けて積み重ねられ、生きられた厚みがある」(若林 2007 : 17)と言う。郊外における生活の積み重ねもまた、一定の歴史性をすでに獲得しており、伝統的村落社会とも都市社会とも異なる形での共同的な関係を作り、「地域の記憶の構成要素となりうる出来事を作り出して」(若林 2009 : 13-14)きたのである。たとえば、空間の均質化を推し進める宅地開発やニュータウン開発の途中で、過去の居住地の跡や埋蔵された文化財が「見つかってしまう」ことがしばしばある。それらの財は郷土資料館や地域の博物館などに展示されることによって可視化され、共有可能なものとなっていく。こうした記憶の資源を活かすような活動が継続されれば、「地域の記憶の新たな共有の場やネットワークが形成されてもゆくこともある」(同上 : 15, 金子 2009 参照)⁴⁾。

そこに構成される郊外的な「時間性」や「歴史性」は、共同的な生活の持続を通じて継承される「伝統」や「記憶」のあり方とは異質な様相を示している。しかし、郊外には郊外の「固有の歴史的な厚みのようなもの」(若林 2007 : 37)が生みだされている。

(……)丘陵の藪や林を剥ぎ取り、そもそもその土地にあったものとは切り離された形の建物や街並みに、さまざまな場所からやってきた人びとが集まって住み始めたとしても、人がそこに住み続けることによって、そこには土地や街なりの^{たえず}佇まいが生み出され、なんらかの社会や文化が、そして広い意味で「思想」と呼んでよいものの厚みが形成されていく。それは当たり前のことだ。もちろんそこにある社会や文化は、いわゆる「歴史と風土に根ざした伝統的な街や地域社会」のそれとは違う。人びとのライフスタイル、価値観、土地との関わりや愛着などが、ニュータウンや郊外という場に特有のものである以上、そこに生み出されるのは、“ニュータウンの文化”や“郊外の社会”なのであって、それ以前のさまざまなタイプの地域社会や文化とは異なっているからだ。(同上 : 36)

では、郊外という地域において、その土地の記憶を想起する、あるいはその記憶を継承する、もしくは端的に“郊外の記憶を生きる”とはどういうことなのだろうか？

5. 「記憶喪失」に抗する身体／都市空間に露出する「痕跡」

都市や郊外の空間が、記憶の厚みを払拭したのっぺりとした表面として現れる時、これに抗い、その土地に累積されてきた記憶を再生させることはもはや不可能なのだろうか。必ずしもそうとは言えないはずである。まず何より、記憶は“空間”にのみ媒介されるものではない。一方で、その空間に足を踏み入れていく人々の“身体”が、記憶の媒体として機能し続ける。

作家・黒井千次は、かつて暮らした町や旅した場所を再訪してつづったエッセイ集『漂う 古い土地 新しい場所』の「プロローグ」において次のように記している。

遙かな記憶を辿るようにして訪れた土地が、自分の内に在るものとは全く別種の空間となって眼前に現れるのに衝撃を受けることもある。ウソだ！と叫びたくなったり、ここはどこだ？と呟きながらただ周辺を歩き廻るしかない場合にも出会う。

記憶の内に生きる光景と目の前の眺めとがあまりにかけ離れてしまった時、人はどちらを信じようとするだろう。自らの中に眠っているのがその土地の本来の姿なのであり、目に映っているのは仮の姿、偽りの面影、素顔を隠すための紗の幕に被われた像に過ぎない、と考えたがるのではあるまいか。(黒井 2013 : 8)

みずからの身体の内蓄えられた記憶と、目の前に現れる光景とのずれ。その時、この身に宿るものの真正性を頼みに、現在の空間の現れを虚像と見なそうとすることがある。

他方、どれほどきれいに過去の形跡を払拭したつもりでも、生活の空間には、必ずと言ってよいほど、その“跡”が露出するものである。

記憶の社会学の創始者であった M. アルヴェックスはこう言っていた。

少なくとも、われわれが現在入りこんでいるもっと最近の集団の中に何らかの痕跡を残さないような社会は、存在しない。こうした痕跡の存続は、この昔の社会に特有な時間の恒久性と連続性を十分説明してくれるし、われわれはこの昔の社会にいつでも頭の中に入れてみるのできるのである。

(Halbwachs 1950=1989 : 157-58)

実際、都市の中心部においても郊外においても、すべての過去の形跡を完全に塗りつぶしてしまうことはできない。とり残された建物や、取り払われなかった礎石や石垣や、古くからの地形にそって存続している道沿いに、それぞれの地域のかつての暮らしの形が物質的な姿をとって露呈している。その空間に参入することは、アルヴェックスによれば、過去の思考の枠組みに再び身を置く手段なのである。

おそらくはこうした文脈で、今（1980年代以降）、都市空間の随所に露出する過去の痕跡を頼りに、記憶喪失症にかかった東京という街の中に“想い出”を呼び戻そうとする試みが、ブームと言

ってもいいような熱を帯びてなされている。それは、“街歩き”という技法である。

6. 土地の記憶を掘り起こす営みとしての「街歩き」 ——赤瀬川源平からタモリを経て中沢新一まで

都市を歩くという営みは、一方において、常に新奇なものへと更新されていく感覚体験を発見するためのものである。しかし、それは同時に、都市空間の中に露出する過去の痕跡と出会うための、“記憶探索”の作業でもある。

“古い地図をもって、街を歩く”ためのガイドブック（竹内 2011など）の類は、現在相当の厚みをもって出版されており、都市の記憶を掘り起こすための「街歩き」がある種の流行となっていることがうかがわれる。そのすべてをここで点検することはできないが、いくつか気になるところをピックアップしてみよう。

「考現学」の流れを意識しながら「路上観察学」を掲げた赤瀬川源平たちの試み（赤瀬川・藤森・南 1993）もまた、都市空間に露出する記憶の痕跡を発見する営みという一面もっていた。例えば、赤瀬川（1985）が「超芸術トマソン」と名づけた、都市空間のあちらこちらに現れる「無用」の物体とは何であったか。それは、かつては何らかの役割を果たしていたに違いないのだが、都市空間の改変のくり返しの中で、たまたま一掃されずに残ってしまった、没機能的な存在のことであった。よく目を凝らして街を観察してみると、そのようにして過去の生活空間の痕跡が「何のためにあるのか分からない何か（＝トマソン）」として見えてくるのである。

もっと身近なところでは、タモリによる「坂道美学」の実践（あるいはNHKの番組「ぶらタモリ」の試み）を挙げることができるだろう。『タモリのTokyo 坂道美学入門』（2011）は、東京の坂道百景とも言うべき街歩きのガイドブックである。タモリによれば、坂道の鑑賞のポイントは①勾配の具合、②湾曲のしかた、③まわりに江戸の風情をかもしだすものがある、④名前に由来、由緒がある、の4点にある。「坂道美学」は、「地形」を楽しむものであると同時に、都市の空間に残存する「歴史」または「記憶」を呼び起こすための実践であることが分かる。しかし、ではなぜその記憶のトポスが「坂道」なのか。「まえがき」には次のように記されている。

江戸の町は非常に計画的に造られている。大きく分けて現在の京浜東北線の東側は下町で、碁盤の目のように東西、南北の道が直行しており、主に町人の町だ。これに対して西側は山の手で、台地と谷の地形から成っており、尾根筋に東西の道その両側に大名屋敷そして谷にわずかに町人が住むという配置だ。大変に美しい町だったようで、当時ヨーロッパから来た外国人が、ベニスよりきれいな街だと感嘆している。下町の道は現在でもほとんどが江戸時代からの道だが、山の手は明治以降の開発で、江戸時代の道はなかなかわかりにくい。しかし坂道だけはそのまま残っており、まわりが変わっているだけだ。（タモリ 2011 : 5）

この一節には、なぜ坂道なのかを考えるためのヒントが少なくとも二つ見いだせる。一つは、江戸時代において、低地＝平坦地は町人の居住区で、高台＝山の手に大名屋敷をはじめとする上層階級の居宅が並んでいたこと。そこには江戸時代の支配階級の文化遺産があり、同時に、坂道は、空間の階層的区分をつなぐ／分ける境界をなしていたのである。そしてもう一つは、明治時代以降の都市の開発の中でかつての景観が失われてしまったが、坂道はその地理的な特徴によって、古い道筋を変えずに残しているということ。つまりそこには、かつて武士や町人たちが往来したそのままの空間が保存されやすいのである⁹⁾。

都市空間を歩くことによって場所に残される過去の痕跡を探っていくという技法は、「江戸」の名残を探るにとどまらず、はるかに長い時間を一挙に超えていくこともある。空間に露出する記憶の射程を、縄文時代にまで遡ろうとする試みは、例えば、中沢新一の『アースダイバー』(2005)に見られる。

中沢は、今東京と呼ばれている場所が縄文時代にどのような地形であり、そこに貝塚や土器が発見されている場所がどのように点在しているのかを示す特製の地図をたずさえて、現在の都市空間を歩いて(または自転車に乗って)回る。するとそこには、縄文時代から層をなして積み重ねられてきた空間の記憶(記憶のトポグラフィー)が浮かび上がる。たとえば、都市に点在する神社や寺院は、開発や進歩といった時間の侵食を受けにくい「無の場所」ととどまっている。それらは、「猛烈なスピードで変化していく経済の動きに決定づけられている都市空間の中に、時間の作用を受けない小さなスポット」として「飛び地」のように散在しながら「東京という都市の時間進行に影響を及ぼし続けている」。そして、中沢によれば、こうした「無の場所」はきまって縄文地図における海に突き出た岬ないしは半島の突端に当たっている。

縄文時代の人たちは、岬のような地形に、強い霊性を感じていた。そのためにそこには墓地をつくったり、石棒などを立てて神様を祀る^{まつ}聖地を設けた。

そういう記憶が失われた後の時代になっても、まったく同じ場所に、神社や寺がつくられたから、埋め立てが進んで、海が深く入り込んでいた入り江がそこにあったことが見えなくなってしまっても、ほぼ縄文地図に記載されている聖地の場所にそって、「無の場所」が並んでいくことになる。つまり、現代の東京は地形の変化の中に霊的な力の働きを敏感に感知していた縄文人の思考から、いまだに直接的な影響を受け続けているのである。(中沢 2005 : 14-15)

したがって、この都市を行き交う人々は、現在時において見える表層の現実だけを生きているのではなく、無自覚の内に「さまざまな時間を同時に生きている」。その時間の重層的な厚みは、都市の「無意識」とでも言うべきものとして残存し、私たちの意識に侵入する機会をうかがっている。中沢は、記憶の地層深くにダイブして潜り込んでいくようなこの「散歩」のスタイルを「アースダイバー式」と名づけ、そのダイバーのまなざしに映る東京の相貌を描き出していく。

東京という都市は、「無意識」をこねあげてつくったこの社会にふさわしいなりたちをしている。目覚めている意識に「無意識」が侵入してくると、人は夢を見る。アースダイバー型の社会では、夢と現実が自由に行き来できるような回路が、いたるところにつくってあった。時間の系列を無視して、遠い過去と現代が同じ空間にいっしょに放置されている。スマートさの極限をいくような場所のすぐ裏手に、とてつもなく古い時代に心の底から引き上げられた泥の堆積が残してある。この不徹底でぶかっこうなところが、私たちの暮らすこの社会の魅力なのだ。(同上：12-13)

街歩きによって都市の記憶を見いだすということは、この「過去」と「現在」が「同じ空間に放置されている」さまに目を向けるということである。それは、線的に進行し、過去を手放して失っていく「時間」に抵抗して、層として積み重なる過去に出会おうとする営みである。「トマソン」の発見も、「坂道」の鑑賞も、その意味で「空間の中にひらけてしまった時間の亀裂」を注視する作業なのである。

この「街歩き」という技法は、おそらく「郊外」の空間においても可能である。たとえば、金子淳(2005)は、昭和初期に聖蹟桜ヶ丘から高幡不動を経て平山城址公園まで、七尾丘陵の尾根沿いに開かれてハイキングコースとして親しまれた道筋(ロマンスコース)をたどりながら、そこに開かれている風景の内に、郊外住宅地の開発の痕跡を読み解いている。この「道」は住宅地のすぐ裏手に、現在も「散策路」として残されているが、それは京王電鉄が(かつて天皇家が狩りの場としていた)「聖蹟」を拠点として開いた観光開発のルートであったという。高幡不動尊の裏山から住宅地を抜けて、多摩動物公園の裏手を抜け、多摩テックの跡地をかすめて、平山城址公園へとつながる尾根道を歩きながら、私たちは、この70年～80年間の東京西郊の開発の歴史をなぞることができる。そのようなまなざしを備えることで、裏山の散策は、同時に記憶を掘り起こすためのささやかな実践に変わっていく。

この時、おそらく“歩く”ということが一つの重要な条件になっている。もちろんただ歩けばよいのではなく、そこに過去についての知識や情報、あるいは物語を重ね合わせて見る必要がある。しかし、そのようにして歩くことで、通常は単なる「通行の場」(粉川)でしかない空間が、歴史性を帯びた場所へと変質する。「歩行」という技による「記憶」の再発見は、都市空間と身体の接続の様式を転換することだと言ってよいだろう。

先にもふれたように、都市や郊外の空間(その物質的な状態)が一方的に“記憶”のありようを規定するのではなく、空間と身体との相互作用において、土地に宿る過去は現出したりしなかったりする。視点を換えれば、私たちを記憶喪失へと追い込んでいるのは、都市空間とそこに参入する人間の身体との接続の様式なのである。

ここで私たちは、「地域」とは常に私たちの身体的な活動を通じて「生きられる空間」であることを再確認しておこう。したがって、都市の外観が変貌し、人々が場所の記憶を失っていくということも、一方的に空間的条件の変化にのみ帰責することはできない。人類学者・小田亮は、現代の

都市空間では街並みを記憶することができなくなるという現象に触れつつも、「記憶できない、のっぺらぼうな町が生まれつつある」のは、「街の景観がそのように変わったというよりも、街や路地での日常的な過ごし方、歩き方、もっとおおげさに言えば、都市を生きるというときの、生き方そのものが変わったせいではないか」（小田 2004：423）と問いを投げかける。例えば、「ランドマークになる建物や行きつけの店」の一つひとつは思い出せても、それらをつないで空間の地図を思い描くことができなくなってしまうことがある。それは「それらの隣接する点と点を換喩的に繋いで、空間を自分なりに作っていくという日常的な歩き方が失われたからではないだろうか。つまり、頭の中で街を歩くことができなくなったのは、日常実践においても都市という空間をもはや私たちは『歩くこと』ができなくなったからだと言えるのではないか」（同上：423）。

この小田の指摘が的を射ているとすれば、逆に、「歩く」という技を取り戻すことによって、私たちは都市空間との関係を、ひいては「記憶」ととの関係を再編成することができるかもしれない。東京の町を地下鉄に乗って移動し、そのポイントごとに地上へと浮上し、用が済めばまた地下に潜って移動していくという生活をしていると、「地下鉄の路線図」の中にしか「都市」の図は成立しなくなる。地上を歩いて移動してみると、点と点でしかなかった場所が、連続的な景観の中でつながっていく。それぞれの場所は、それらを相互につないでいる“道”との関係の中で位置取りを回復し、都市区間の中に固有の場所を占める。その“道”を歩くという行為を通じて、都市は記憶を回復していくのかもしれない⁶⁾。

7. 土地の記憶を創出する装置としての「聖地巡礼」

空間の中に埋め込まれている記憶を掘り起こす作業とは対照的に、地域空間の外部で創造された形象を呼び込みながら、場所の記憶を創出する営みもまたありうる。

例えば、アニメ作品の舞台となった土地を、そのファン（オタク？）が訪ね歩く「聖地巡礼」という行為。『らき☆すた』の舞台となった埼玉県久喜市鷲宮や、『けいおん!』の舞台である滋賀県犬上郡豊郷町の豊郷小学校などが、聖地として名高い。アニメファンによる「聖地巡礼」は、現在「コンテンツ・ツーリズム」という呼び名のもとに地域振興の枠組みに組み入れられ、村興し・町興しの切り札としても論じられている（増淵 2010, 岡本 2013）が、土地の記憶の創造という観点からも評価することができるだろう。

アニメの聖地を巡礼することは、現実（3次元）の生活空間に、フィクション（2次元）の物語体験を重ねあわせる行為であり、次元の異なる「リアリティ」の衝突を通じて、特定の場所に「聖性」を付与しようとする（疑似）宗教的なふるまいである。アニメのキャラクターたちは、いわば「神」であり、通常は「現実世界」から切り離された空間（天上＝2次元空間）に住まうのであるが、巡礼という信徒たちの集合行動によって「降臨」し、その場所を祝祭の空間に変える（筆者は実見していないが、鷲宮の地元の祭り土師祭に2008年から「らき☆すた神輿」が登場したのは、この現象の宗教性を示唆するものではないだろうか）。その体験は、それぞれの「場所」に集会的

記憶を醸成し、その（疑似）宗教的共同体の絆のよりどころとなる。巡礼者にとっても、地元の人々にとっても、「アニメの登場人物やその中での出来事」は、もはや「現実」の外部にある異次元の「虚構空間」の中での存在ではない。それはその土地においてあった「神話的な出来事」として語られうるだろう。

この「聖地巡礼」という現象は「アニメ」という「異界」からの侵入であったがゆえに、過度に特異な出来事として注目されているように見える、しかし、集合的記憶の醸成プロセスとして見れば、必ずしも新奇なものではない。例えば、私たちの中で、「東京タワー」はすでに「モスラが羽化した場所」として記憶されてはいないだろうか。とりわけ、想起の場面において、（少なくとも私には）東京タワーは神話性を帯びた場所であり、その聖性の幾分かは、鉄塔に糸を絡めのけぞるような姿勢で羽化を待っていたあの巨大な蛾の幼虫のイメージによって醸し出されている。

8. 郊外のクロノトポスへ

文学作品は、それぞれの土地の記憶と交渉し、これを呼び起こしたり、引用したり、編集したりすることによって、「空間」と「時間」の統合的形象化を図る。私たちはそのテキストを読みほぐすことによって、それぞれの空間がどのような時間性をもって構成されているのかを考えることができる。

そして、「クロノトポス」の形象として、私たちの前に差し出されたテキストを携えて、現実の「町」を歩くことができる。小説的想像力の媒介によって、「記憶なき郊外」との関係をいかに結び直すことができるのか。平板な時間性に回収された（かに見える）この奥行きのない空間を、どのような歴史性と物語性のもとに再発見できるのか。これが以下の一連の考察の最後に立ち戻らなければならない問いである。

しかしまずは、いくつかのテキストを選び、その作品に内在する「時空間」の認識を抽出してみなければならない。

【注】

- 1) 私自身の身近なところで言えば、最近東急東横線が地下鉄に乗り入れるのにもなって、東横線渋谷駅が地下に移されてしまった（これも渋谷地区全体の再開発の一環である）。私にとって、渋谷駅は、ドーム状の屋根に覆われた、ターミナルスタイルの、半ば野外的な空間であり、現在の地下駅に降りても「渋谷に来た」という気が全然しない。私の母（長く東横線沿線に暮らしてきた人だ）などは、ほとんど憎悪と言っていいほどの感情をこの新渋谷駅に向け、これを回避するために、わざわざ遠回りして、恵比寿経由で山手線に乗り換えたりしている。渋谷での乗り換えが「遠くて不便」だからだと言っているが、そこに込められた嫌悪の根っこには、自分自身のなじみの場所を奪われてしまったことへの恨みがある、と私はにらんでいる。さてしかし、それは町の表層的なデザインが一新されてしまう場合だけに

生じる出来事ではない。例えば、東京駅の駅舎の再構築のように、歴史的な建造物を保存する形で“再開発”が進められる場合でも、同様の感覚の断絶は起こるように思われる。

- 2) 加藤周一(1988)が東京という都市の特徴としてあげたのは、①人口の稠密さ、②空間的な広さ、③全体的な都市計画の不在、④安全と清潔、⑤景観の醜悪さ、そして⑥変化の速度である。
- 3) それは郊外の住人によっても発せられる。金子淳(2009)参照。
- 4) 杉本星子(2007)もまた、人類学的な視点から京都府向島ニュータウンにおけるフィールドワークを展開し、郊外住宅地のトポグラフィーがいかに関「土地の記憶」を組み入れながら構成されてきたのかを考察している。
- 5) 江戸・東京が台地と谷の織り成す凹凸の町であったことが、街歩き、そして記憶の掘り起こしの手がかりになるという事情は、皆川典久『東京「スリバチ」地形散歩』(2012)などにも通じる。
- 6) 街を歩くということは、空間と自己とのつながりをその身体性において回復・修復するふるまいであるが、それは同時に、身体的な体験を通じてその都市空間に固有のイメージを与える(=想像する)作業でもある。中沢による「アースダイバー式」の街歩きがあからさまに「想像力」の行使であったことから分かるように、場所の内に記憶を読み込む、そこに時間的次元を導出するということは、その空間のイメージ上の再編(再編集)という性格を帯びる。その意味で、街歩きを通じて「想像上の都市」が構築されるということができる。この一面を、一種の遊びとして展開させている事例として、今和泉隆行の『みんなの空想地図』(2013)がある。街を歩く、あるいはバストリップをくり返していた少年は、やがてその「体験」から生まれた空間イメージを、想像上の地図に投影し、ヴァーチャルな〈町〉を描き出していく。その地図上の地域は、一種のフィクションであるが、現実の空間を独自の方法で変換させたものだと言える。その意味で、きわめてリアルな「架空地図」が描き出されていくし、その地図上の道筋を「仮想的に歩く」ことで、町並みを想い描くことができる。このような「変換」の想像力もまた、作家が〈町〉を造形する際に駆使する力と比較することができるものではないだろうか。

第2章 記憶の説話的媒介

世界とは、さまざまな時間の多層的な流れ、時間どうしの戦いだ。

どの時間を逃れ、どの時間にすべりこむか。

その渡りだけがきみの旅を定義すると、ぼくはしだいにおもうようになった。

(菅啓次郎『狼が連れだって走る月』)

1. 土地の記憶を呼び起こす営みとしての物語

土地の記憶は、その空間的外観の刷新に抗して、さまざまな物語的営みによって呼び起こされ、あるいは創出される。そうした、多様な記憶実践の網の目の中に、おそらく「文学」と呼ばれている“言葉”の働きもまた位置づけることができる。

ここでは多和田葉子『犬婿入り』(1992)と三浦しをん『むかしのはなし』(2005)という二つの作品をピックアップして、これを“郊外の記憶”という観点から読み直してみることにしよう。二作品はいずれも、「説話」や「昔話」という媒体を現代小説の中に呼び込み、これを通じて、表層的には見えにくくなった郊外の記憶を形象化しようとしているように思われる。そこに、郊外のクロノトポスを描き出す「文学的技巧」の働きを見ることができるだろう。

2. 多和田葉子『犬婿入り』(1992年)

多和田葉子は、東京の西郊の町に育ち、立川の高校に通って十代の日々を過ごした。長じてドイツへと移り住んだ後、越境の作家、つまり“境”を越えて移動する人間を描く書き手となっていく。だが、それだけに彼女は、土地や場所の力にきわめて鋭敏な感性を示す作家でもある。『犬婿入り』は、東京の郊外の「町」に舞台をとって展開される奇譚である。

(1) 物語

物語の舞台は、多摩川に近い「町」である。駅を境に「北区」と「南区」に分かれている。北区は鉄道沿いに発達した新興の住宅地で、公団住宅が建築された30年ほど前から人が住み始めた地域。南区は川沿いの古くから栄えてきた地域で、「竪穴式住居」の跡もあれば、稲作の伝統も古い、江戸時代から宿場町として栄えた歴史をもっている(89)。

南区に、取り壊される予定の一軒家を借りて、北村みつこという女が学習塾を開く。〈キタムラ塾〉は人気になり、普段は南区に足を踏み入れることのない「団地の子供たち」が「塾の日」になると多摩川の方へ向かって「せかせかと」移動していくようになる。塾を開いた北村みつこは、39歳という年齢の他はその経歴もよく分からず、子どもたちに向かって〈エッチなこと〉か〈汚

いこと〉か分からないような話をしたり、肩こりの薬に「ニワトリの糞を煮て作った軟膏」を塗ったりするような、異風なところのある人物であった。その北村が、子供たちに〈犬婿入り〉の話をしたということが、母親たちの耳に伝わってくる。それは、昔ある王宮に仕える女が、お姫様のお尻を拭いてあげるのが面倒臭くなり、王宮で飼われていた黒い犬に「お姫様のお尻をきれいになめておあげ。そうすればいつかお姫様と結婚できるよ」と言っていたところ、お姫様もすっかりその気になってしまったという、異種婚姻譚であったが、その後の展開については子どもの記憶がばらばらで、幾通りものストーリー（異聞）が伝えられることになる。

そのキタムラ塾に、扶希子という小学校3年生の女の子が入ってくる。扶希子は男の子たちからいじめられ、女の子たちからは無視されている様子で、変わり者として扱われていた。みつこは扶希子に対して特別な気持ちを抱くようになり、やがて扶希子は毎日学校が終わるとみつこの家に来て、夕食を食べて帰るようになる。みつこに可愛がられるようになって、扶希子は表立っていじめられることがなくなったが、陰では意地の悪い噂がささやかれるようになり、特にその父親がゲームセンターで〈腰を振っている〉（どうやら「ゲイバー」で「腰を振っている」という語りを子どもたちが間違っただけで広めているらしい）と言われている。

ある日、みつこの家に、27、8歳の男がひとりやってくる。男は「太郎」と名乗り、「電報、届きましたか」と尋ね、憶えないみつこが戸惑っていると、いきなりみつこの服を脱がせ、彼女の尻を持ち上げて肛門をペロンペロンと舐め始める。男・太郎はみつこの家に住みつき、「先生の家」に若い男性が住んでいることが、子供たちと母親たちのあいだで噂になる。太郎は、みつこの体のニオイを嗅ぐことだけに関心があるようで、料理や掃除や洗濯などをしている時以外には、他に何もしようとしない。

そんな中、塾に通う子どもの母親の一人である「折田さん」から電話があり、みつこの家にいる太郎は自分の夫のものと部下である「飯沼」であるように思うと告げられる。飯沼は、大学を卒業後折田の夫の会社に入り、同じ課にいた良子という女性と結婚したのだが、一年ほどすると突然姿を消してしまったのだという。折田の紹介で、良子がみつこの家に来てくれる。良子は太郎を見て、あれは間違いなく夫であった男だが、自分はもう太郎を取り戻すつもりはない、夫は以前野犬に噛まれたことがあり、それ以来まったく別の人格になってしまったのだと言う。

翌月、折田夫妻が上野の駅で、飯沼が扶希子の父親・松原利夫と二人で旅行に出ようとしているのを目撃し、それを北村みつこに伝えようとするのだが、電話がつかない。みつこの家まで行ってみても応答はなく、〈キタムラ塾は閉鎖されました〉という告知だけが残されている。翌日、折田夫妻のもとに、「フキコヲツレテヨニゲシマスオゲンキデ」という電報が届く。まもなく、キタムラ塾のあった家は取り壊され、アパートが建つことになり、子供たちは新しい塾を見つけ、南区に足を踏み入れることもなくなってしまう。

(2) 〈けがれ〉のトポグラフィ

この奇妙な物語は、舞台となっている「町」そのものを主題化する、いわば“空間の表象”とし

て成り立っているものとして読むことができる。より正確に言えば、この郊外の空間に生じている、時間の振れと、その亀裂に浮上する固有の（奇妙な）現実感を頼りに語りだされる物語として『犬婚入り』はある。

まずは、物語の舞台となる「町」が、どのような空間的構造を有しているのかをテキストに沿って確認しておこう。

そもそもこの町には北区と南区のふたつの地区があって、北区は駅を中心に鉄道沿いに発達した新興住宅地、南区は多摩川沿いの古くから栄えていた地域で、今では同じ多摩に住んでいても南区の存在すら知らない人が多いけれども、北区に人が住み始めたのはせいぜい公団住宅ができてからのこと、つまりほんの三十年ばかり前のことで、それに比べて多摩川沿いには、古いことを言えば、竪穴式住居の跡もあり、つまりそのような想像も及ばない大昔から人が暮らしていたわけで、稲作の伝統も古く、カドミウム米の出た六〇年代までは堂々と米も作っていたし、また〈日本橋から八里〉と刻まれた道標の立っているあたりは、小さな宿場町として栄えたこともある。空襲を免れた古い家も多く、そんな南区に団地の子供たちが出かけて行くのは、以前は写生大会とカエルの観察の時くらいだったのが、キタムラ塾ができてからは、子供たちは塾へ行く日が来ると、まるで団地の群れから逃れようともするように、せかせかと多摩川の方へ向かい、広い自動車道路を渡って、神社の境内の隣を通して、梅園をこっそりくぐりぬけて近道し、北村みつこの家の垣根の壊れたところをくぐりぬけて、庭に跳び込んで行くわけだったけれども、一番最初の子供たちが跳び込んで来ても、北村みつこは机に向かって待ちかまえているわけではなく、大抵はボタンをつけていたり、本を読んでいたりと、足の爪を切っていたりしていた。(89-90)

駅、あるいは鉄道を境界として明確に南北に分断された「町」は、その配置において、歴史性（時間的な厚み）を異にする二つの空間からなる。「北区」は、30年ほど前から始まる郊外型の住宅開発（公団による団地建設）の後に人が住むようになった新開地であり、そこには典型的と言ってもいいような“記憶なき郊外”が広がっている。他方、「南区」は、近世以前からの歴史を有する村落地帯であり、そこには伝統的な生活の慣習も、その痕跡となる景観や建物も残されている。ただし、「農家」が廃業して、その家屋の取り壊し・建て直しが進んでいるように、郊外化の波の中でかつての生活基盤と、それに付随する空間的な個性は失われつつある。

この「北」と「南」は、鉄道によって物理的にも象徴的にも分断されており、特別な理由がなければ、「北」の子どもは「南」の地区に足を踏み入れない。郊外の新住民と旧住民との生活圏の切断が、空間上に戯画化された形で形象化されているのである。そして、「南」の地区は「川」（多摩川）に近い。土地の高低差に関する記述は作品中に見いだせないが、南が「低湿」な場所（「湿った」場所）であるのに対し、新しく団地が建てられた北区は、高台の「乾いた」場所という対照性をもっていると見て間違いのない（「湿った場所」と「乾いた場所」の象徴的対照性については、中沢 2005 を参照）。

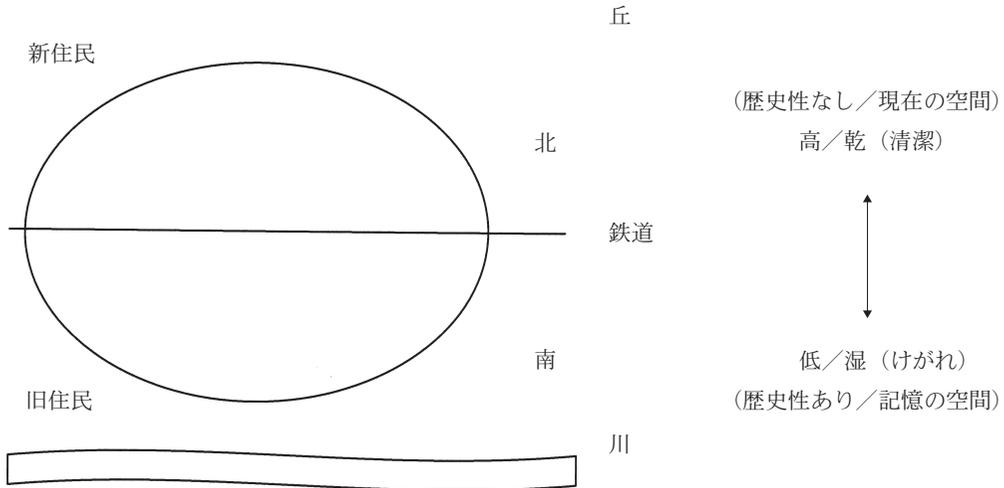


図1：『犬婿入り』の「町」

北区と南区の対照的な関係は、上の図1のように見ることができる。

「北」の住民たち（団地に入居した新住民）にとって、「南」は不可視の世界である。彼ら／彼女らは、その存在を見ないことにしながら生活を送っている。それは、この土地に埋め込まれた“記憶”を自分たちの生活圏の外へ排除することによって、居住地域の秩序が保たれているということでもある。

歴然として存在しながら、その生活空間の外部に破棄されねばならないものは（象徴的な次元において）“けがれ（汚れ／穢れ）”のしるしを帯びる。「北」の居住区は“清潔”と“衛生”の空間であり、「南」に存在するものは、この清潔な空間を脅かす“汚れたもの”“汚いもの”という位置価値を与えられている。物語は、ひとつの象徴的コードとして、“清潔／けがれ”という対立項に沿って進行している。それは、「南区」にできた「キタムラ塾」の貼り紙が、「北」の居住地域においてはどのように現れているかを示す作品冒頭の記述においてすでに鮮明である。

〈キタムラ塾〉と北村みつこがピンク色のマジックペンで書いた文字が雨ににじんで、電話番号などは紙が破れて半分しか読めず、しかも鳩のフンがこびりついて黄色く変色しているので地図もよく見えなくなっていたけれども、この団地で小中学生の子供がいる母親ならば誰でも塾の場所くらいは知っていたので、地図が見えなくなっても困る人などいなくて、この貼り紙は剥がしてしまってもいいのに、あまり汚いので触るのが嫌なのか、わざわざ剥がそうとする人もなく、なにしろこの団地では団地文化が始まって三十年の間に、自分の家の中は毎日きちんと片付けても外の通りに捨てられていた気味の悪い物には触らない伝統が定着し、道の真ん中に車にひかれた鳩がつぶれていても、酔っぱらいのウンチが落ちていても、それを片付けるのは市役所の仕事と決めつけていて、この貼り紙にしても、その

うちボロキレのようになって空中分解してしまうまで触ってみようという人はいないだろうというほどの無関心ぶり。(80)

「キタムラ塾」の貼り紙は、鳩の「死骸」や酔っぱらいの「ウンチ」並みの扱いを受けている。「北村みつこ」の開いたこの学習塾は「北区」の住民たちからは「キタナラ塾」と呼ばれている。そして、その塾を運営する女は、衛生の規範に縛られた北の住人たち（塾生の母親たち）の感覚にはなじまない“^{けが}汚れ”の感覚を体現している。二度使った鼻紙を「お尻を拭く時に使う」と「気持ちがいい」という話をしたり、ニワトリの糞で作った臭い軟膏を肩に塗っていたり。そこには、郊外の団地住民の文化にはなじまない“におい”が立ち上っている。

だが、北の「子供たち」を惹きつけているのは、「北村みつこ」のこの“汚さ”である。“どろどろ”や“べたべた”を愛する子どもたちは、清潔に整えられた空間を汚すものに魅了される。彼らは“けがれ”を求めて、南の塾へと通っていく。

こうした作品世界の象徴的構造に沿って見ると、『犬婿入り』は“衛生”をめぐる攻防戦として読むこともできる。

そして、この“清潔さ”と“汚さ”の闘いは、過去をもたない空間としての“郊外”に対して、“土地の記憶”が侵入していく物語という“時間軸”上の意味秩序に沿うものでもある。

(3) 説話的媒介——伝奇的物語を呼び戻す場所

“過去”は、空間全体の中でも“低く”“湿った”場所に宿っている。水は、その記憶の溜まりを示す象徴的な意味を帯びる。町の南端に流れる「川」は、北の住宅地の秩序には包摂されずに、時を超えて同一の景観を体現する「記憶の場」でもある（その意味で、都市における「坂」と同じ位置を有している）。そしてそこには、郊外の清潔な空間とは本質的に異質なものが宿る。川本三郎の言葉を借りれば「都市の隅の水辺にはまだかすかに異界が残っている」（川本 2012 : 345）のである。

したがって、川辺は、郊外の新住民たちにとってはどこか“危険な”場所でもあり、子どもたちを迂闊に近づけてしまってはならない（潜在的な）“悪所”である。その“危険な周辺地帯／境界地帯”に流れ込んできた“謎の存在”として、北村みつこは登場する。『犬婿入り』は一種の「流離譚」である。どこか外の場所からやって来た素性の知れないものを、“共同体”がどのように迎え入れるのかが問われている。北の住人たちは“流れ者”“であり“変わり者”でもある「北村みつこ」をどのように扱ってよいのか分からない。彼女たちは、この塾教師の放つけがれの感覚を危ぶみながらも、どこか“貴種”として、あるいは“聖性”を帯びたものとして、「みつこ」を遇しているようにも見える。いずれにしても、「みつこ」は郊外住宅地に対する異物であり、よそ者である。町の秩序を攪乱し、揺さぶる危険な存在として、彼女は「南」の一画に居を構え、そこに「子供たち」を呼び寄せている。

その「みつこ」を媒介として、「北の住民たち」が目を背けようとしているもの、見ないふりを

しようとしているものが立ち現れ、浸透していく。その“侵入”を可能にしているのは、「みつこ」が語る、そしてみづから体現する“古い物語”である。〈犬婿入り〉は、はじめは「昔話」として、みつこの口から子どもたちに語られていく。子どもたちは、それを母親たちに語り継ぐ（かなりでたらめな記憶によって、したがってまた、そのつど新しい物語の版を立ち上げながら）。しかし、それが「塾」において「先生」が「生徒」に語った物語（昔話）であるあいだは、まだこの「町」にとっても危険なものではない。ところが、「犬」に噛まれたことで、人格の変容をきたしてしまった男・太郎が、「北村みつこ」の前に現れ、女の尻を舐め始めるに至って、物語空間は一挙に説話的な空間へと接続あるいは変容していく。

「太郎」は、その象徴的な位置において見れば、すでに“獣”（動物）である。太郎は、もともと「町」の住人であったのだが、その“外部”へと離脱してしまった“異界の存在”である。この“動物”との性的交わりを受け入れてしまった時点で、「みつこ」もまた“現実の秩序”を脅かす両価性を身に付けてしまったと言えるだろう。「太郎」の妻であった良子は、かつて自分の夫であった存在が、もはや自分の暮らす空間の住人ではないことを見抜いている。彼女は、もはや夫を取り戻そうとはしない。「太郎」は、やはり町の住人である「男」（ただし彼もまた、町の秩序に適応していなかった）を連れて、“外”へと旅立つ。みつこは、この「男」の娘であった子どもを連れて、やはりいずこもしれぬ場所へ消えていく。

結局のところ、「キタムラ塾」それ自体の存在が幻であったかのごとく、その痕跡がかき消され、おそらく町の住人たちはそれを忘却していくに違いない。郊外の空間に侵入した「犬」は、たちまち姿を消して、その痕跡を残さない。

この一瞬の幻影のような、北村みつこと飯沼太郎の物語とはいったい何だろうか。それは、もはや“異界のもの”としてしか認識されない、土地の記憶の一瞬の想起のごときものではなかっただろうか。それは「記憶」であるのだが、もはや“^{アレゴリカル}寓話的な歪曲”を経ることなしには、現在の空間に呼び戻されない。言わば、それをごく当たり前の伝承として語る言葉を欠いた、いびつな形の記憶である。だからこそそれは、この郊外空間を脅かす〈異物〉として立ち現れながら、その住民たちは正しくその正体を見極めることができない。

文庫版の解説で与那覇恵子が記すところによれば、「団地や旧市街の住人たちの日常からは逸脱しているように見えるみつこや太郎らの言動は、様々な噂を紡ぎ出す。だがその噂も、本質を見まいとする母親たちの視線によって回収される。説話の世界では異質な存在は、共同体に組み込まれている無意識の『制度』を浮かび上がらせ破壊する脅威を与えるものであった。だが現在、普通の〈人間〉とは異なる位相に在るみつこたち〈異類〉は、かつてのように共同体に強い衝撃を与えない。電信柱に張りついている『キタムラ塾』の貼紙のように剥がれずにしぶとくしがみついているシミのような存在でしかない」（与那覇 1998：146）。

〈異類〉の存在が、町の秩序を脅かしきれないというのは、確かである。だが、本当に「母親たち」のまなざしはこの「異物」を「回収」しているのだろうか。むしろ、最後の最後まで把握しきれないものとして、立ち現れていながら見えないものにとどまっているのではないだろうか。そ

の擦れ違いも含めて、『犬婿入り』は郊外空間の「アレゴリー」である。その作品世界には、マジョリティの言語によっては正しく指示されることのない、過去の痕跡が宿っていると言うべきであろうか。

3. 三浦しをん『懐かしき川べりの町の物語せよ』(2005年、『むかしのはなし』所収)

三浦しをんもまた、土地の記憶のうごめきに鋭敏な作家である。彼女の作品では、かなりの割合で、物語の舞台となる土地が特定されている。そこでは、虚構の名を冠せられているにせよ、実在の空間が借り受けられているにせよ、その場所に生きてきた人々の“過去”が“現時点”での物語の空間に侵入し、これを下支えしたり、動揺させたりしている。

一連の作品を読み進めてみた時に非常に巧みだと感じられるのは、その舞台となる場所の土地柄(地域特性)によって、その空間に現れる“記憶”の形や様態が異なっており、その差異が作品空間全体の雰囲気の違い(さらには、文体の違い)に結びついていることである。例えば、『神去なあなあ日常』、『神去なあなあ夜話』のような、“伝統”の継承が途絶えていない「山村」を舞台にしている時には、その地域に宿る記憶が物語空間全体を支えて、読者は安定的な意味世界に身をゆだねることができる(『神去』シリーズは、都市からその村に移動した若者が、その空間に蓄積されてきた人々の知恵を発見し、学び取り、成長していく物語である)。あるいは、『白いへび眠る島』のように、伝奇的な物語が人々のコスモロジーの中に息づいているような場所に舞台が取られ、ただし、その伝統的世界の動揺が主題化される場合もある。これに対して、『政と源』のように、東京の下町に舞台を取った作品では、その地に生まれ育ち、ずっとそこで生活をしてきた二人の老人が主人公に置かれ、随所に回想的な語りがはさまれることで、(都市空間の)表面には見えにくくなった“歴史”が呼び込まれてくる。そして、『まほろ駅前多田便利軒』に代表される“郊外”空間に舞台を置いた作品では、中途半端に損なわれ、しかしきれいに塗り込められているわけでもない“場所の記憶”が、過去と現在の混然とした空間の中に配置され、それが登場人物たちの個人的な記憶と呼応しながら、物語を生成させていくように見える。

ここでは、『むかしのはなし』に収録されている『懐かしき川べりの町の物語せよ』を取り上げて、文学作品がいかにか“郊外の記憶”を語ろうとしているのかを見ていくことにしよう。

(1) 物語

舞台は、やはり多摩川沿いに位置する町である。語り手は、この町に暮らし、高校に通っていた「僕」。物語の中心に置かれるのは、「僕」の高校2年生の時のクラスメートである神保^{ももすけ}百助、通称「モモちゃん」である。モモちゃんは、ヤクザの情婦で「なんかの見せしめのために樹海の奥の大木に吊^{つる}されて死んだ」と語られる母親の子で、補導歴24回、鑑別所送り3回と噂される「伝説」の高校生で、手ぶらで登校し、教室の一番後ろの席で居眠りをしているか、フルーツサンドを食べるかして、毎日を送っている。みんな恐れて近づこうとしないが、密かな尊敬を集めている。その

モモちゃんにため口をきくことのできる二人の高校生がいる。一人は、同じマンションで育った幼馴染・有馬真白^{ましろ}。もう一人は、モモちゃんの彼女で、ヤクザを父親に持つ宇田鳥子^{とりこ}である（鳥子の父親、城之崎組^{きのさき}の組長・田山は、実はモモちゃんの父親でもあるらしい）。

語り手である「僕」は、ある日、多摩川の河原でホームレスの家を破壊しようとしていた中学生たちからまれているところを、たまたま通りかかったモモちゃんと宇田さんに助けられ、その後モモちゃんのマンションに遊びに行く間柄になる。特に何をするでもなく、だらだらと過ごす時間が流れていくのだが、ある時、宇田さんが、自分の母親はダイヤモンドを飲み込んで自殺した、その腹から回収されたダイヤを父親は愛人に贈ったのだと語る。それを聞いてモモちゃんたちは、そのダイヤを盗みに行くことにする。愛人・来島^{きしま}さくらのマンションに押し入ったモモちゃんは、運転手を殴り倒し、さくらを縛りつけ、ダイヤモンドを奪ってくる。

その頃（これは、語りが進んでいく中で次第に明らかになっていくのだが）、地球には隕石が接近しており、三カ月後には衝突して人類が減びようとしている。地球を脱出するためのロケットが準備され、そのチケットが抽選で当たることになっている。

学校に、田山が現れる。田山は「僕」に脱出ロケットのチケットを一枚渡し、これを「百助」に渡せ、でも自分のものにしてしまってもかまわないと告げる。「僕」はそのチケットを自分のものにして生きのびる。しかし、モモちゃんはそれを知っているらしく、もしチケットが手に入っても「欲しいのなら、おまえにやる」、「おまえは一人で長生きする。俺は鳥子と一緒に地球に残る」と告げる。

物語は、ロケットに乗って脱出した「僕」が、後年になって回想した語りである。

（2）郊外、中産的秩序と暴力

『懐かしき川べりの町の物語せよ』もまた、郊外の「町」に共在する二つの異質な集団（文化あるいは階層）の接触する場面を描き出している。

一方の集団は、語り手である「僕」によって代表される。「僕」は「山を崩してつくった住宅街」の中の一戸建てに住み、地元の高校に通う高校生である。両親と弟と4人暮らし。「父とは顔を合わせてもとりたてて会話もなかった」（186）という記述からは、サラリーマン家庭で“父親不在”の状況がうかがえる。母親は子どもを塾に通わせることにばかり熱心で、しかし「僕」が実際にどういう日々を過ごしているのかも分かっていない。部活にも入らず、成績も悪い。ただ単調で退屈な日々を過ごす「僕」は、典型的な郊外的中産階級の子どもの位置づけを与えられている。

僕の生活は、とても単調なものだった。

山を崩してつくった住宅街の一戸建てを、毎朝七時五十五分に出る。八時過ぎのバスに乗って、駅前の商店街のはずれにある高校に着くのが八時二十分。教室で友だちとしゃべりながら、始業までの十分を過ごす。

あとは一日、決められたとおりに椅子に座ったり校庭で体を動かしたりし、クラブには入っていないから、放課後は暇をもてあまして、教室でいつまでも友だちとふざけたり、駅前で寄り道したりする。

帰宅が夜の八時よりも遅くなることは、めったになかった。(185-186)

もう一方の集団は、「モモちゃん」と「宇田さん」によって体现される。二人は、ともに「ヤクザ」を親にもつ“裏社会の子どもたち”であり、郊外のマンションに生活の拠点を置いて高校に通ってきているが、根本的にサラリーマン家庭の子どもたちとは相容れない。と言うより、郊外中産的な常識の上に成り立つ「秩序」を完全に超越した世界に生きている（たとえば二人は、体育館のマットレスの上でセックスに及び、人に見られても何ら悪びれるところがない）。その意味で、「モモちゃん」や「宇田さん」もまた、この地域コミュニティから見れば〈異類〉である。それ故に彼らは、“普通の子どもたち”から恐れられ、また尊敬されている。「モモちゃん」は“最強の高校生”という“伝説”のオーラをまとっている。

その超越ぶりは、彼らの“暴力性”において顕在化する。「モモちゃん」は地域の多勢に囲まれても、そいつらを張り倒して、かすり傷で学校に通ってくる。自分を噛みついた犬を、逆に殴り殺してしまう。「宇田さん」もまた、中学生の頭を平気で角材で殴りつけたりする。力と力のぶつかり合う場面において、瞬発的に相手を上回る動きを見せることができる。そこに、二人の卓越性を見いだすことができる。

しかしそれは、“普通の高中生”が“没暴力的”で、「モモちゃん」たちが“暴力的”という単純な二項対立の中にあることを意味するわけではない。

郊外の中産的秩序もまた、ある種の暴力によって、その“外部”に位置するもの、外部との“境界”にあるものを排除することによって成立する。その一面を端的に示しているものが、川辺における“ホームレスの住居”に対する襲撃である。「町」にとって「川辺」が“異界”としての象徴的価値を有することは、前節においても述べたとおりである。この作品では、その川辺に居所を見いだしている人々の住まい（段ボールとブルーシートで作られた家）を、中学生たちが（何の脈絡も示されないまま）破壊している場面が描かれる。その破壊行為を、“清潔”な居住間に対する“異物”の醸し出す“穢れ”への排除衝動に基づくものと見ることにさほどの無理はない。「中学生」たちは、自分たちの都市の“衛生”を脅かす存在に怖れを感じ、それを殲滅しようとするのである。

この中産的秩序維持のための暴力に「モモちゃん」が立ちはだかるという構図には、したがってある種の必然性がある。そして、偶然その場に居合わせた「僕」が、その事件を契機に「モモちゃん」たちのグループに接触し、そこに入り込んでいくのである。

ただし、「モモちゃん」の暴力は、決して“正義”のための力の行使ではない。彼にとってみれば、自分に噛みついてくる「犬」を殴り殺すことと、この「中学生」を叩きのめすことにさほどの違いはない。ただ、そこに殴り倒すべき者がいるから殴り倒す。ただそれだけの、シンプルな行為。

そこに「モモちゃん」的な生の形がある。「モモちゃん」が、郊外空間の秩序を超越するのは、このシンプルさ（まっすぐさ）ゆえである。そして、その“身もふたもなさ”において、「モモちゃん」は説話的世界に接続する。

（3）説話的媒介（身もふたもないものとしての「生」）

『むかしのはなし』は短編連作集であり、個々の作品はそれぞれに「昔話」を下敷きにして、これを現代の空間に移し替えた物語として語られていく。各作品の冒頭には、ベースに敷かれた物語（「かぐや姫」「花咲か爺」「天女の羽衣」「浦島太郎」「鉢かづき」「猿婿入り」「桃太郎」）の粗筋が故意にそっけなく要約された形で、提示されている。

昔話には、近代的な読者の期待を裏切るような、身もふたもない物語が語られている。そこには、教訓も道徳的な含意もない。ただこのようにあったとしか言いようのない「生」の形が、ある意味では剥き出しの形でさらけ出されている。『懐かしき川べりの町の物語せよ』の元となる「桃太郎」の粗筋は、次のように語られている。

桃太郎

おばあさんが川で洗濯をしていたら、大きな桃が流れてきた。家へ持って帰り、おじいさんと一緒に食べようとすると、桃が割れてなかから男の子が生まれた。おじいさんとおばあさんは、その子を桃太郎と名づけて大切に育てた。

成長した桃太郎は、おばあさんが作ったきびだんごを腰に下げ、鬼が島へ鬼退治に向かった。桃太郎は、途中で出会った犬と雉と猿にきびだんごを与え、自分の供として彼らをつれていった。

鬼が島に着いた桃太郎は、犬、雉、猿と協力して、鬼を退治した。鬼の大將は、「命だけは助けてくれ」と言い、宝を桃太郎に差し出した。桃太郎は宝を車に積み、犬、雉、猿に引かせて、おじいさんとおばあさんのもとへ帰った。(176)

「桃太郎」の話と「モモちゃん」の話。二つの物語を構成するアイテムの対応関係は明確である。

表1：『懐かしき川べりの町の物語せよ』と「桃太郎」の項目相関図

〈小説〉：〈説話〉

モモちゃん：桃太郎

宇田さん：雉

有馬：猿

僕：犬

きびだんご：フルーツサンド

鬼：ヤクザ（来島さくら⇔鬼ヶ島，城之崎組⇔鬼之崎組）

財宝：ダイヤモンド

『懐かしき川べりの町物語せよ』は、現代版の「桃太郎」として語られている。この語り直しを考える上で大事な一つのポイントは、「桃太郎」には何の正義もないということにある。彼は、何のいわれもなく「鬼」たちの島を襲い、そこに蓄えられていた「財」を奪って逃げる。それは“善”でも“悪”でもない。ある意味で、純粹で無意味な行為である。その行為を正当化するものがあるとすれば、それは強奪の相手を「鬼」と名指す「共同体」の側のまなざしだけである。「鬼」とは、共同体の外部にあって、村の秩序を脅かす何者かに付された徴（ラベル）でしかない。しかし、その鬼を「退治」に行く桃太郎も、川を流れてやってきた（＝共同体の外部から到来した）〈異類〉の子である。その象徴的な位置において、桃太郎は「鬼の子」とは言ってもいい。

同様に、『懐かしき川べりの町物語せよ』では、強奪の相手が「ヤクザ」という徴によって差別化されている。しかし、何の罪もない女と運転手を縛り上げて、ダイヤモンドを盗み出すという「モモちゃん」たちの行為に何の理（正義）もないことは明らかである。そして、「モモちゃん」もまた、「鬼（＝ヤクザ）の子」であり、共同体の外部に生まれ、この「町」に流れ着いてしまった〈異類〉に他ならない。

こうして、桃太郎という傍若無人な主人公の位置に「モモちゃん」という破格の高校生を置くことによって、作品は郊外の生活空間に説話的な物語を呼び入れる。それは、近代社会が忘却してしまった生の形、“身もふたもないもの”として営まれていく生活の記憶を招来する装置である。

（４）郊外の町を回想する

しかし、この作品が何より巧みなのは、「昔話」を呼び込みながら“現在”を語るという意匠をまといつつ、その“現在”を“回想”の対象に据えているというところにある。

『むかしのはなし』という作品集は、読み進めていくにしたがって、この星に間もなく隕石が衝突し、いわれもなく滅亡する運命にあることが分かっていく、という構成になっている。そして、作品集の最後におかれた『懐かしき川べりの町物語せよ』では、語り手（「僕」）が、ロケットに乗って星を脱出した後、この「町」の思い出を回想するという形式がとられている。「モモちゃん」たちは、すでに死んでしまった（に違いない）存在であり、彼らの一夏の思い出は、完全に失われてしまった過去として想起されている。

屋上からは、銀色に光る駅舎の屋根や、長くのびていく線路、その行く手に横たわる多摩川の流れや、遠くにかすむ緑の丸っこい山並みを、すべて見渡すことができた。僕はその景色を眺めるのがとても好きだったんだ。

僕の暮らしていた町の風景。もうずいぶん昔に見たきりだけど、いまでも目を閉じると浮かんでくる。

これから人類がどれだけほかの惑星を開拓したとしても、あれと同じ風景を手に入れることは、絶対にできない。(191)

どこにもたどり着くべき目標点のないグダグダの日々を思い起こすという物語行為が、地球滅亡

後という破天荒な設定のもとになされている。終わりなき日常の突然の“終わり”。その終焉後に回想される日常の風景。親父の愛人からダイヤモンドをかつばらいに行くという冒険譚。それは滅亡を前にした「町」の暮らしの一コマである。

無駄なことをしたものだ、と思うひともいるかもしれません。三カ月後には隕石が地球にぶつかる運命だったのに、わざわざダイヤモンド一個を盗みに入るなんて、と。

でも僕はそうは思わない。

八月の残りの半分を、僕たちはモモちゃんの部屋で、それまでと変わらず過ごしました。隕石についての話題は、ほとんど出なかったような気がする。

有馬の日焼けした皮膚を、みんなでそろそろと剥いて楽しみました。宇田さんの鎖骨には、いつも大切そうに提げられたダイヤが光っていました。モモちゃんは相変わらず、我慢できなくなると自分でフルーツサンドを作って食べました。そして僕は、それらの光景をかけがえのないものと感じ、夏が永遠に終わらなければいいのにと感じていました。(258)

「無駄なこと」しか起こらない日常を、「かけがえのないもの」として語るための装置として、それを滅んでしまった星の記憶に据えるという設定が選択されている。郊外的な平板な生活の空間はいとおしい思い出の場として語られる。(隕石の衝突によって)文字通り「難民」と化した「僕」にとって、この「町」こそが懐かしむべき「故郷」となっている。“記憶なき”郊外の町が、“記憶の中にしかない”思い出の地となっているのである。

こうした見方をする時、三浦しをんの諸作品には、別に特別なこともない「日常」を懐かしむ視線、今現在の生活への郷愁とでも言うべき感覚が働いていることに気づかされる。僕たちは、記憶されるべき日々を今生きている。「町」はやがて思い出となるべき“ふるさと”なのである。

4. 説話的記憶と郊外の町の物語

多摩川の辺りに位置する「町」を舞台に取った二編の物語作品を取り上げて見てきた。二作品に共通しているのは、郊外の住宅地として開発されている空間をその典型性において描出しながら、その中に、この「町」の秩序に対する異物として立ち現れるような存在を住まわせていることである(『犬婿入り』における「北村みつこ」、『懐かしき川べりの町の物語せよ』における「モモちゃん」)。

そして、この「町」に闖入してしまった〈異類〉は、いずれも、説話的な世界をこの郊外的空間に呼び込む回路として機能している(「犬婿入り」の説話と、昔話としての「桃太郎」)。

説話は、それ自体において“記憶”の伝承の形式である。そこには、かつて人々が経験した出来事の記憶が変形され、凝縮された形で具現化されている。しかし、そこに内包される物語的な“知”は、その形式性において、すでに過去のもの(前近代的なる認識)として受け止められる。

したがって、説話的なものの導入は、二重の意味で記憶の呼び込みという性格をもつ。それをここでは、記憶の“説話的媒介”と呼んでおこう。現代の都市・郊外を舞台として構成される小説は、“説話”を媒介として、みずからの物語空間に“記憶”を呼び寄せている。

こうした“説話的媒介”の技法は、“過去”を表象する特異な形式となる。それは、生活の中に埋め込まれた“伝統”や“慣習”としての記憶とも、正統な保存場所（P. ノラの言う「記憶の場所」）に取められて展示された「集合的記憶」とも、“歴史”という形で言語的に構成された過去の“事実”とも異なるものとして、今現在の生活空間の中に、言わば“忍び込む”。それは、必ずしもその土地に宿る“記憶”として認知されるとは限らない。むしろそれは、“異形”のものとして現れ、いかように対処してよいのかも分からないものとして、回収も排除もできないままに、この空間を循環する“浮遊項”となる。

言い換えれば、説話的な媒介による過去の闖入は、この空間の中に流れる時間を切断し、亀裂を生み、多層化していく働きをもつ。説話的な時間とは、都市空間の歪みに現れる異種の時間である。それは、理解されきらず、その意味で「町」の生活の秩序には回収されないまま“現在の時間”に侵入し、そこを通過して去っていくような“異様な時の流れ”を呼び起こす。二つの小説テキストは、そのようにして、この土地に宿る複数の時間を並列させているのである。

他方で、二つの作品は、それぞれに異なる形で“未来”の時間とのかかわりを描いている。そこに語られた物語を“現在”の位置に置く時、『犬婿入り』における「北村みつこ」の逸話は、彼女が「町」を去り、「キタムラ塾」が取り壊されてしまったことによって、「北」の住人たちの記憶からは瞬く間に消え去ってしまう。その物語が語られている“時間”の中だけに存在し、その後には痕跡も残さない、一瞬の幻想のごときものとして立ち消える（『犬婿入り』に語られるのは、農家が転業して廃屋となった家が、アパートに建て替えられるまでの“隙間”の時間に起こった出来事である。農村的な風景が郊外住宅地の景観に塗り替えられる合間に浮上した、消え去るべき過去の形象の浮上）。

これに対して、『懐かしき川べりの町の物語せよ』では、「モモちゃん」と過ごした一夏が、この星＝町の滅亡後の時点から想起され、「むかしばなし」として語られるという構図の中で、言わば“記憶化”されている。私たちが今「桃太郎」の話を何らかの“記憶”の器として受け継いでいるように、「僕」たちは「モモちゃん」の話を継続する。先述のように、“現在”が想起の対象に置かれ、“懐かしき”ものとして語られる。そのようにして、“記憶”は生成し続けるのである。

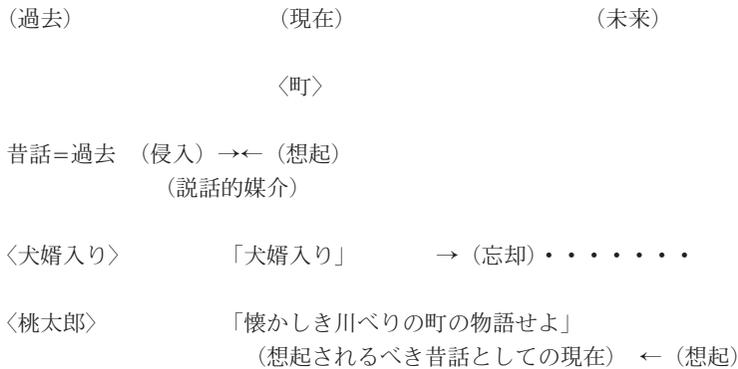


図2：『犬婿入り』および『懐かしき川べりの町の物語せよ』の複層的時間編成

では、この作品（テキスト）を媒介として、私たちはいかに郊外空間にかかわることができるのだろうか。

それは、この物語テキストを媒介項とした時に、私たちが現実の都市・郊外空間との関係をいかに結び直すことができるのか、そしてその時、「時間と空間の交わり（クロノトポス）」がどのような形で経験されるのかという形で問われざるをえない。そこで私たちは、「テキストをもって町に出る」ことにする。次章では、『犬婿入り』の舞台となる空間を訪ね、歩いてみよう。

【テキスト】

三浦しをん 「懐かしき川べりの町の物語せよ」、『むかしのはなし』初出2005年、幻冬舎→幻冬舎文庫版、2008年

多和田葉子 「犬婿入り」, 初出1992年、『群像』（1992年12月号）→講談社文庫版、1998年

【参考文献】

赤瀬川原平 1985 『超芸術トマソン』, 白夜書房（→ちくま文庫版、1987年）

赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊（編） 1986 『路上観察学入門』（→ちくま文庫版、1993年）

東浩紀・北田暁大 2007 『東京から考える 格差・郊外・ナショナリズム』, NHKBooks

M.M. Бахтин 1975 *Формы времени и хронотопа в романе*, (北岡誠司訳, 「小説における時間と時間間の諸形式」, 伊藤・北岡・佐々木・杉里・塚本訳, 『小説における時間と時間間の諸形式 ミハイール・バフチン著作集5』, 水声社, 2001年)

枝川公一 1979 『都市の歩き方』, 北斗出版

———1993 『東京はいつまで東京でいられるか』, 講談社

Halbwachs, Maurice 1950 *La Mémoire collective*, (小関藤一郎訳, 『集合的記憶』, 行路社, 1989年)

細野助博・中庭光彦（編） 2010 『オーラル・ヒストリー 多摩ニュータウン』, 中央大学出版部

今和泉隆行 2013 『みんなの空想地図』, 白水社

- 石原千秋 2005 「郊外を切り裂く文学」, 吉見俊哉・若林幹夫(編)『東京スタディーズ』, 紀伊国屋書店
- 金子 淳 2005 「変容する徒歩空間——「ロマンスコース」の光と影」, 吉見俊哉・若林幹夫(編)『東京スタディーズ』, 紀伊国屋書店
- 2009 「多摩ニュータウンにおける『伝統』と記憶の断層」, 『日本都市社会学会年報』27号, 日本都市社会学会
- 加藤周一 1988 『NHK特別シリーズ 日本その心とかたち9 東京・変わりゆく都市』, 平凡社
- 川本三郎 2012 『郊外の文学誌』, 岩波書店
- 粉川哲夫 1984 『都市の記憶』, 創林社
- 黒井千次 2013 『漂う 古い土地 新しい場所』, 毎日新聞社
- 増渕敏之 2010 『物語を旅するひとびと コンテンツ・ツーリズムとは何か』, 彩流社
- 前田 愛 1982 『都市空間の中の文学』, 筑摩書房 →ちくま学芸文庫版, 1992年
- 松本博之 2004 「〈都市的なるもの〉の嬖——身体性からの逆照射」, 関根康正(編)『〈都市的なるもの〉の現在 文化人類学的考察』, 東京大学出版会
- 皆川典久 2012 『東京「スリバチ」地形散歩』, 洋泉社
- 宮台真司 1997 『まぼろしの郊外 成熟社会を生きる若者たちの行方』, 毎日新聞社
- 三浦 展 1999 『「家族」と「幸福」の戦後史 郊外の夢と現実』, 講談社現代新書
- 2004 『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』, 洋泉社新書
- 三浦展・藤村龍至(編)2013 『現在地Vol.1 郊外 その危機と再生』, NHKBooks 別巻
- 中沢新一 2005 『アースダイバー』, 講談社
- 西川祐子 2009 「ニュータウンの記憶のゆくえ——高蔵寺ニュータウンの地域メディア変遷の事例からの考察」, 『日本都市社会学会年報』27号, 日本都市社会学会
- 西村清和 2009 「場所の記憶と廃墟」, 『美學』60(1), 日本美学会
- 小田 亮 2004 「都市と記憶(喪失)について」, 関根康正(編)『〈都市的なるもの〉の現在 文化人類学的考察』, 東京大学出版会
- 小田光雄 1997 『〈郊外〉の誕生と死』, 青弓社
- 荻野昌弘 2012 『開発空間の暴力 いじめ自殺を生む風景』, 新曜社
- 岡本 健 2013 「コンテンツツーリズムの可能性と課題」, 『都市問題』, 2013年10月号, 後藤・安田記念東京都市研究所
- 関根康正(編)2004 『〈都市的なるもの〉の現在 文化人類学的考察』, 東京大学出版会
- 管啓次郎 1994 『狼が連れだって走る月』, 筑摩書房(→河出文庫版, 2012年)
- 管啓次郎, 十和田奥入瀬芸術祭(編)2013 『十和田, 奥入瀬 水と土地をめぐる旅』, 青幻社
- 杉本星子 2007 「ニュータウンのトポグラフィー——向島ニュータウンと巨椋池の記憶をめぐる考察」, 『人間学研究』, 京都文教大学
- 鈴木智之 1999 『パラレルワールドの変容——村上春樹と社会言語的状況の現在(3-1)』, 『社会志林』46(1), 法政大学社会学部学会
- 2013 『眼の奥に突き立てられた言葉の鉆 目取真俊の〈文学〉と沖縄戦の記憶』, 晶文社

- タモリ 2011 『タモリの Tokyo 坂道美学入門 (新訂版)』, 講談社
- 竹内正浩 2011 『地図と楽しむ東京歴史散歩』, 中公新書
- 谷村 要 2013 「ファンが『聖地』に求めるもの」, 『都市問題』, 2013年10月号, 後藤・安田記念東京都市研究所
- 近森高明・工藤保則 (編) 2013 『無印都市の社会学 どこにでもある日常空間をフィールドワークする』, 法律文化社
- 斗鬼正一 2013 「東京, 『変』な街歩き」, 『都市問題』, 2013年10月号, 後藤・安田記念東京都市研究所
- 若林幹夫 2005 「郊外を生きるということ——空虚さの中の過剰さ」, 吉見俊哉・若林幹夫 (編) 『東京スタディーズ』, 紀伊国屋書店
- 2007 『郊外の社会学——現代を生きる形』, ちくま新書
- 2009 「郊外, ニュータウンと地域の記憶——集合的記憶の都市社会学試論」, 『日本都市社会学会年報』27号, 日本都市社会学会
- 与那覇恵子 1998 「文庫版解説」, 『犬婚入り』, 講談社文庫
- 吉見俊哉・若林幹夫 (編) 2005 『東京スタディーズ』, 紀伊国屋書店

* 本稿は, 2013年度・法政大学多摩シンポジウム (2013年11月3日) 「自由なる民の言の葉」における報告をもとに, 加筆・修正を行ったものである。報告の機会を与えてくださった法政大学経済学部・藤沢周先生をはじめ, シンポジウムの運営にかかわられた先生方・スタッフの方々にあらためてお礼申し上げます。